

「日本血管外科学会創設期の記録」

戸田中央総合病院 特任顧問

元東京医科大学外科学第二講座主任教授

石丸 新

平成 4 年（1992 年）、血管外科研究会および同フォーラムで培われた血管外科の臨床および研究を統合する学術団体として、日本血管外科学会が創設（改称）された。同年 7 月に学会事務局が東京医科大学外科学第二講座に委譲されたが、その背景には、研究会を主導されてきた故三島好雄先生（東京医科歯科大学第二外科教授）の盟友である故古川欽一先生（東京医科大学第二外科教授）が、関東地区に所在し血管外科を標榜する講座の主任教授として円滑な事務局運営に適すると判断された事情もあったと考えられる。

同講座の助教授という立場であった故か、愚生が学会幹事兼事務局担当として慣れない事務作業を拝命する仕儀となり、まずは学会定款の起草に着手した。しかし、何分にも先例がなく、各種学会の規則・規定を渉猟するほかなかった。また、広く会員の参画を得ることを目的に、全国 7 ブロックの地方会組織を立ち上げるにあたり、すでに各地域で活動実

績のある研究会や同好会との調整に苦慮した記憶がある。

ある朝、学会のアイキャッチを作ろうと思い立ち、当時の最先端ソフトであった MacDraw を用いてロゴマークの自作に取りかかった。

JSVS の組み合わせ文字自体は比較的うまく仕上がったものの、これを学会名で囲む描画において微妙なズレが生じてしまい、当時のコンピュータデザイン技術の限界を痛感することとなった（図 1）。

学会雑誌の発行にあたっては、新たに投稿規定を策定するとともに、提出された英文抄録に誤訳のないよう、親交のあった故 J. Patrick Barron 教授（東京医科大学国際医療コミュニケーションセンター）に校閲をお願いした。Barron 教授には、英文査読者としてばかりでなく、その後の学会の国際化においても多大なご貢献を賜った。学会の顔ともいえる会誌の表紙は、白地（リンパ）に青（静脈）を基調とし、下端に学会ロゴを配した赤

帯（動脈）を設ける装丁とした。さらに、青色部分の下端を円弧状に描き、これを背表紙から裏表紙にまで連続させるという、密かな仕掛けを施している。

学会発足当初は、年度予算の大半が会誌発行に充てられており、会員への配布に要する郵送料の削減が喫緊の課題であった。そこで、郵送料が格安となる第三種郵便物の指定を受けられるべく、発行部数500部以上、年4回の定期出版を条件とする学術刊行物の認可取得を目指した。しかし、投稿論文のみでは定期刊行の要件を満たす掲載本数を確保できなかったため、総説や地方会記事などのコンテンツを加えるとともに、総会プログラム集に原著論文1編を掲載して定期発行号に組み入れる方策を案出した。これらの工夫を重ねた結果、創刊（1992年10月）から8か月後の1993年6月14日、学術刊行物としての認可を取得することができた。

そのほか、学会機関誌の出版に関わる広範な

業務については、委託先であったマイライフ社の多大なご尽力により円滑に進めることができた。しかし、急速に進展するデジタル化の流れには抗しがたく、最終的に出版事業をメディカルトリビューン社へ譲渡するとの理事会決議に至った。事務局としてマ社と業務打ち切りを直接折衝する役回りを担ったが、当方の苦渋の決断をご理解くださった島田社長には、今なお申し訳ない思いを抱いている。

学会事務局をお預かりして11年目にあたる2004年、任意団体であった日本血管外科学会は、特定非営利活動法人（NPO）の認証を受けた。諸事情により翌2005年に学会理事職を返上することとなったが、法人設立時役員のみ末席を汚らせていただいたことは、まさに合縁奇縁というほかない。

日本血管外科学会の基盤作りにあたっては、故中島伸之初代理事長の卓越した決断力と、学会幹事としてご一緒した重松宏先生の的確な問題解決力が不可欠であった。この間、

事務局担当者として、ほとんど独断専行とも言える振る舞いがあったことは否めない。故三島好雄先生、故勝村達喜先生、故田邊達三先生、故古川欽一先生をはじめとする血管外科の先達ならびに諸先輩方から賜ったご温情に甘えたが故と、小稿をもってご寛恕をお願い申し上げる次第である。

-----

図 1 :

